

【5】実践事例 — 授業づくり —

〔1〕生活単元学習

前項の本年度の取り組みの中で意欲的に取り組むための授業づくりについて述べたが、小学部ではこのための指導形態として生活単元学習を重視している。生活単元学習の中でも、子どもたちが目的と方向性を持って主体的に取り組んでいきやすいのは、学校や学部の行事・季節行事の行事単位であると考えた。行事単位は、以下のような利点がある。

- a 行事に向かうための様々な活動が含まれている。
- b ほぼ、結団式（導入・計画）→準備・練習→行事の実施→反省という流れをとるので、見通しがたてやすく主体的に取り組みやすい。
- c 行事が段々に近づいてくるので、緊迫感があり必要に迫られる。
- d 低・中・高学年とも共通で、毎年決まった行事が繰り返されることが多く、不安や戸惑いがなくなると同時に、過去の経験が生かされ次の学年への期待感を持つことができる。過去の経験が主体的な取り組みを促していく。

このような行事単位を行なっていくために、以下のことを留意していった。

- ・小学部の全員が参加する合同学習とクラス学習との連携を考えながら、できるだけ多くの学習の場を設定していく。
- ・前の単元との系統性も重視していく。
- ・導入や計画の段階で、高学年の児童の経験に基づいた発言や行動を重視して取り上げていく。

行事単位は6年間を通して以下の表のように、展開される。

月	1組の生活単元学習	2組の生活単元学習	3組の生活単元学習
4	みんななかよし この単元は小学部行事「新入生を迎える会」を含む。※	みんななかよし	みんななかよし
5	おかあさん	おかあさん	修学旅行※
6	おふろ たなばたはっぴょうかい※	みずあそび たなばた発表会※	たなばた発表会※
7	みずあそびしゅくはく※	みずあそび宿泊※	プール宿泊※
9	うんどろかい※	うんどろ会※	運動会※
10	いもほりしゅくはく※	いもほり宿泊※	自然の家宿泊※
11	がくしゅうはっぴょうかい※	学習発表会※	学習発表会※
12	クリスマスかい※	クリスマス会※	クリスマス会※
1	へんしんごっこであそぼう	へんしんごっこで遊ぼう	へんしんごっこで遊ぼう
2			
3	1ねんかんのおもいで	1年間のおもいで	1年間の思い出

※は、行事単位を表す。

この表の学習内容が、6年間の繰り返しの中でどのような系統性を持ちながら、合同学習や学級でコミュニケーションに視点をあててどう展開されていくかを、以下宿泊・劇づくり・案内状を通して具体的に述べていきたい。

(1) 宿泊学習を通して

本校小学部では、主に生活訓練棟に設置された和室・風呂等を利用して、各クラス毎に年に2～3回の宿泊学習を行っている。宿泊学習の単位では、身辺自立に関わる基本的な生活習慣の確立や生活経験の拡大、その外にも友だちや教師との共感関係を広げる等の様々な目標を含んでいる。題材としては、プール、いもほり等の子どもたちの大好きな活動を中心に置き、それに関わる1日の生活を組み立てて行っている。6年間という長い期間に何度も宿泊学習を経験していくため、子どもたちにとってはパターン化された大まかな1日の流れや準備等に関して、見通しがもちやすく安心して取り組んでいける単位である。しかし展開は同じではなく、学年が進むにつれて自主的活動を増やしたり、校外活動を組み入れたりするなど、発達段階や個に見合った目標を設定して、1年ずつの積み上げをもとに次年度に発展させている。また、宿泊学習に関わる楽しい活動を目標に意欲を沸き立たせ、自分の気持ちを出して友だちと共感し、生活経験を拡大するなど、コミュニケーションの基礎作りに通じる活動を多く含んでいる。さらに、高学年では話し合い活動や宿泊生活の中で、自分の意見だけでなく他の意見も少しは認めていくといった自制心の素地も養えると考えられる。以下では、小学部における宿泊学習の実践について述べてみたい。

① 初めての宿泊に楽しんで取り組ませた実践（小学部1組）

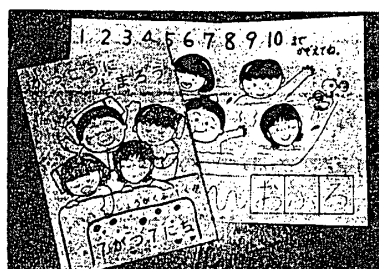
小学部1組は、1年生4人（男女各2名）で構成されたクラスである。7月に行った「みずあそびしゅくはく」が学校に泊まる初めての経験であった。児童の実態としては発達段階が2:3～3:4（遠城寺・H6.5）と低いうえ、生活経験も非常に浅く、親元を離れて宿泊した経験のない子どもも半数いた。学校での宿泊に対して全く見通しがもてないため、授業づくりにあたっては以下の点に配慮し、指導にあたった。

家庭との連携	アンケートや連絡ノートで就寝生活に伴う細かな点について家庭と話し合った。
あたため	事前に宿泊の絵本(写真・下)を家庭に持ち帰らせ、生活の流れを無理なく知らせた。
教師の対応	教師ができるだけ視聴覚に訴える教材を準備し、ゆっくり丁寧に提示した。
楽しめる活動の選定	プールやおやつ作り、おふろなど、子どもたちにわかりやすく楽しめる活動を多く盛り込み、少し先の小さな楽しみを目標にさせ意欲をつなげていった。

当初はあまり興味をもたない児童もあったが、学習で実際にお風呂に友だちと入ったり布団を敷く練習を遊び感覚で繰り返したりする中で、少し先の見通しがもてはじめ、自分で楽しんで準備をする子どもの姿も見られるようになった。また、「学校に泊まって、友だちや先生と一緒に寝ようか？」



宿泊の日程を紙芝居で



宿泊のしおり（絵本）



みんなで背中をゴシゴシ

の問いかけに、嬉しそうに「うん。」とうなずいたり、体や顔の表情全体で楽しさを訴えたりする子どももいた。宿泊当日は特に大きな混乱もなく、日常の学習の時と同じように楽しい活動をつながながらどの子どもも楽しんで1泊2日の日程をこなした。終了してから宿泊のビデオを見て、「花火をしたよ。」「プール、楽しかったね。」と話し合い思い出を振り返りながら、やっと子どもたちの中で「学校に泊まった」という概念がつくられていくものと感じた。

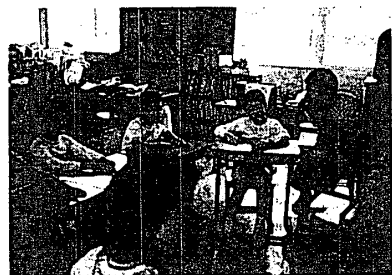
②見通しをもつことで主体的に取り組んでいった実践(小学部3組)

小学部3組になると宿泊に関する過去の経験が豊かで見通しがもちやすく、計画の一部を話し合い活動によって決めることができだした。話し合い活動では、好きな活動への興味をバネに自分の意見をはっきり出し、友だちの意見も聞きながら決めていく中で、自主性を持ち、自分たちにもできるという自信につながられたと思われる。さらに教師が話し合い活動の中で、意図的に葛藤場面を作ることにより、自分の主張に意味付けをしたり、自分の意見は取り下げても納得してみんなで決めたことを認め受け入れていくといった自制心の芽生えに通じる体験も期待できた。

右表は、宿泊の夕食のメニューについて話し合った内容の一部である。子どもたちだけで話し合いを行うにはまだ難しいので、教師が進行役を務め、意見を拾いながら揺さぶりをかけたり、解決法のヒントを提示したりした。ただカレーがいいと自己主張するだけのN男、理由づけをしてシチューを提案するO男、ジャンケン等の解決方法を提示する

T男など、発達段階に応じて様々な意見が出された。一時は自分の意見のみを強く主張し合う場面も見られたが、教師が代案を提案したり、解決のヒントを与えることにより、子どもたちの気持ちに整理がつき、自分の意見を持ちながらも話し合いのうで納得してメニューを決定していった。また、実際の夕食では楽しんで調理や食事を行い、楽しかった思い出に変えていくことができ、少しは我慢して友だちの意見を取り入れてもいいことがあったという体験になった。

このような話し合い活動を通して、友だちや先生とコミュニケーションをはかり、その中で自分自身が納得したり自制したりといった体験を積み重ねていくと考えられる。



3組の話し合い活動

(話し合い活動の一部 平成6年7月4日)

教師	宿泊の晩ごはんは何が食べたいの？
N 男	カレーライス。カレー、カレーがいい。
T 男	カレーつくる。
O 男	えー、またカレーか。あきる、あきる。シチューがいい。
M 男	ハンバーグ(小声で)。
教師	Sくんは何が好き？
S 男	えっと、えっとなー、えっとー。
T 男	(Sくんは)うどん。
N 男	カレー、カレーライス。
O 男	シチュー！
教師	カレー、ハンバーグ、意見がいろいろ出たなー。困ったなー。どうしようなー。
M 男	じゃんけん、じゃんけん。
O 男	みんなで言おうで、「シチュー！」
N 男	カレー！
O 男	カレーは今まで何回も作ったが。だめだめ。絶対にだめ！
口々に	ラーメン！
	カレー！
	シチュー！
教師	あ、そうだ。ごはんは晩だけじゃなくて朝もあるんだ。みんなが食べられるものがある。
O 男	Sくんも食べられるものがある。

(2) 劇づくりを通して

我々は、生活単元学習の中で、劇づくりをとっても大切にしている。それは、劇活動によって、次のような利点が得られると考えたからである。

- ・登場人物や場面を知り、劇の流れを理解していくことで、見通しを持って動くことができる。
- ・登場人物との同一化（みたて・つもり活動）によって、イメージを育てることができる。
- ・ことばと人の動き、場面とことばのつながり、感情とことばのつながり、ことばと動きなどで、ことばやことばの周辺の学習ができる。
- ・友だちと一緒に行動したり、協力したりすることで、共感関係が得られると共に、集団参加の能力の向上が期待できる。
- ・表現できた喜び、成功の喜び、たくさんの人に見てもらい誉められる成就感により、自信が持てる。

このことは、我々が目指す「身近な人と、楽しんでコミュニケーションする子」を育てることに直接つながるものだと考えられる。

そこで、劇を指導するにあたって、次のことを大切にした。

- ・楽しんで力いっぱい取り組むことを第一に考え、子どもたちの表現を認め、評価する。
- ・動きのパターン化、音楽の効果的な利用、ステージ上の目印など、子どもたちが見通しを持って動けるように工夫する。
- ・個に応じた台詞や動きを設定し、また教師の援助の仕方、個に応じて配慮する。
- ・教室環境等を整え、掲示物などを劇の雰囲気を感じ取れるよう配慮する。
- ・背景画・小道具など劇で使う物を子どもたちが作ることで、主体的に取り組ませ、表現活動への意欲を高める。

以上のことに気をつけながら、子どもたちの良い点を見つけ、自信や楽しさを持たせ、それが意欲へとつながるようにしている。

劇活動としては、年間に、「たなばた発表会」（学部行事・6月下旬～7月下旬・学級別の取り組み）と、「学習発表会」（学校行事・10月下旬～11月上旬・合同の取り組み）がある。また「新入生を迎える会」（4月）「クリスマス会」（12月）「6年生を送る会」（3月）の3つの学部行事の中では、プログラムの一つとして、表現活動（劇・ダンス・音楽等）に取り組んでいる。

ここでは、先の2つを取り上げ、その実践について述べる。

たなばた発表会

笹飾り作りと、家族を招待して1学期の成果を見てもらふ発表会とが、学習の中心になっており、言語・身体表現の活動や、造形的な活動が多く含まれる単元である。

新しい学級編成になって3か月目のこの時期に、学級別に取り組むことで、「学級の友だちと力を合わせて、一つのことをやり遂げる満足感・安心感を味わわせ、学級の連帯感を深める」といったことも期待できる。

題材の選定で大切にすることをまとめてみる。

- **わかりやすい話であること** それには、子どもたちや見る人がよく知っている話を取り上げたり話の筋を簡略化したり、繰り返しを多くしたりする。
- **普段の生活から発展させる** 日頃の遊びを発展させたり、子どもたちの好む歌を話に仕立てたり、子どもたちの得意な言葉や特徴的な動作などを取り上げ発展させたりする。

脚本の作成上大切にしたことは次の2つである。

- **音楽を有効に使う** テーマ音楽・場面を特徴的に表現する音楽、キャラクターに合った音楽・動きのきっかけを作る音楽・ダンス曲など、音楽を効果的に使う。
- **一人ひとりを生かす** 子どもひとりずつが主役であるという考え方で、その子の個性に合った配役や、その子の望む配役にしたり、一人ひとりの発表場面を必ず用意したり、自発的なことばや動きを大切に引き上げていったりする。

以上のことは、各学級が共通して大切にしたことであり、次には、子どもたちの豊かな表現を引き出すために、各学級が行った配慮や手立て、子どもたちの変容についてまとめてみた。

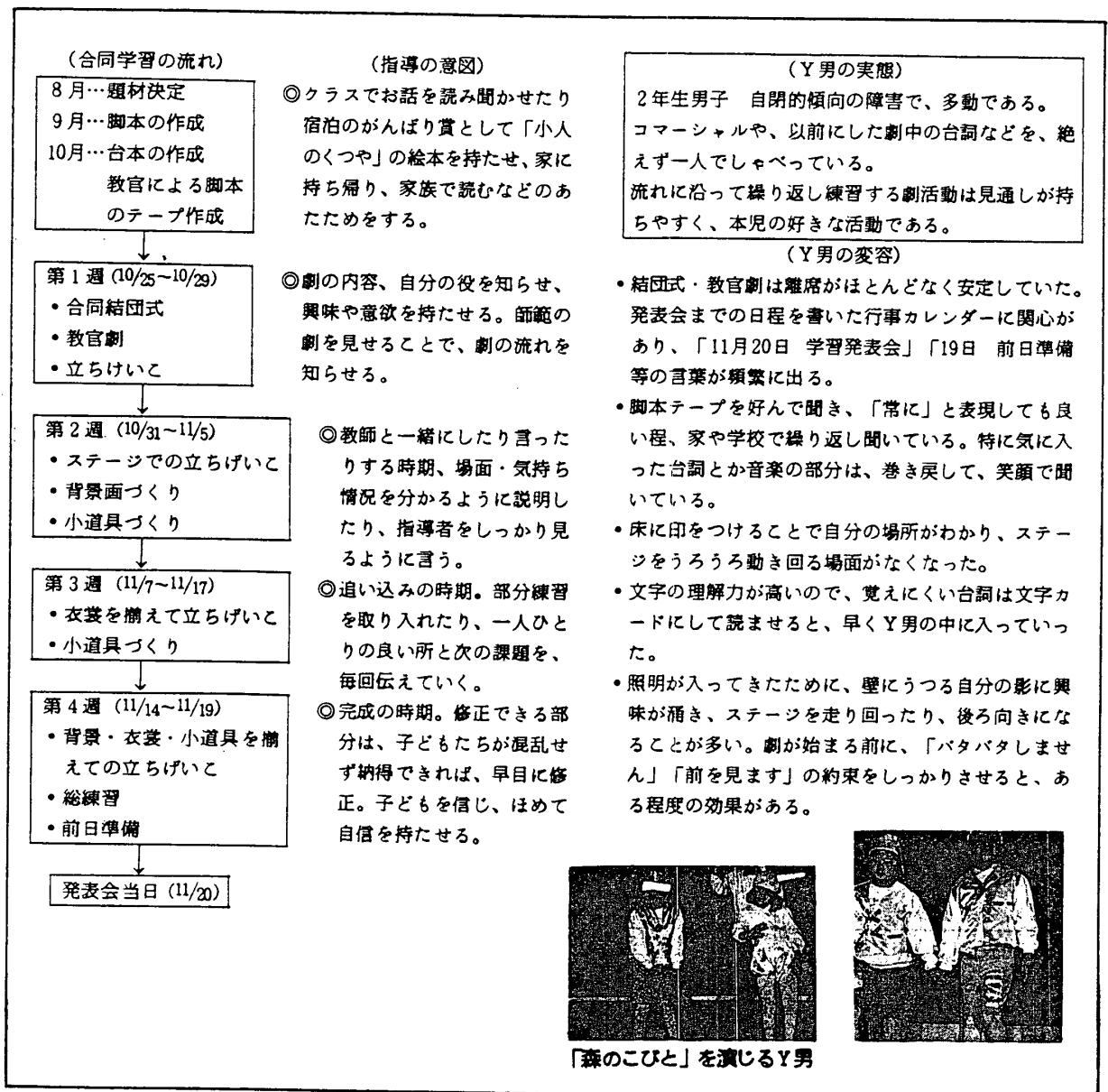
	子どもの実態	配慮や手立て	子どもたちの変容
1組 森の ファミ スト リ ー	本校での劇活動の経験がなく、見通しが持てない。自我の充実期にある子が多く、興味のない活動に対しては無関心である。言語発達が未熟で、発語が困難な子どもも2名いるが、ジェスチャーは豊かである。	<ul style="list-style-type: none"> • なじみのある曲を選定する。 • 親しみがわき、好きなもの（食べ物・動物）が登場する。 • わかりやすいストーリーにする。 • 台詞だけでなく、体を十分に使った表現方法を取り入れる。 	練習当初は離席することが多かった子どもたちだが、繰り返すうちに、劇の流れが少しずつわかって、「今は自分が出る時」「今は待って、友だちがするのを見る時」がわかってくると、楽しんで参加できるようになっていった。発表会がすんだ後も、自由時間に自分たちで脚本テープをかけて、自由に楽しんで演じている姿が見られた。
2組 おむす び ころり ん	昨年までの経験があり、近いことなら、少しは見通しが持てる。慣れた場面なら、落ち着いて活動に取り組むこともできる。発語が困難な2名がいるが、ことばと動きを組み合わせることで、表現を楽しめる。	<ul style="list-style-type: none"> • 慣れ親しんできた話を劇化する。 • 自信をもってできるもの（台詞・動き・手遊び・ダンス等）を入れこむ。 • 個性を考慮し役柄を決定する。 • 劇の配役を子どもたち自身が劇中で自己紹介するなど、一人ずつの追い込み場面を作る。 	配役が子どもたちの個性と合い、一人ひとりがいきいきと動いていた。場面の構成や子どもの台詞・動きを、子どもの実態に合った無理のないものにしたことで、子どもたちが見通しを持って動けたと思う。繰り返し指導する中で、段階をおって、徐々に教師の援助の手を少なくしていき自分たちで演じることができていた。
3組 金の が ち ょう	発表会についてや、劇をすることについて楽しみに待つ子が多い。発語が不明瞭な子どもが3人いる。友だち同士で助け合ったり注意し合ったりが、少しずつできた。	<ul style="list-style-type: none"> • 教材選び、配役等、話し合いながら決め、子どもたちの意見を尊重する。 • 台詞・動きの、繰り返しのおもしろさを大切にする。 • 劇に使う小道具を子どもたちが作ることによって、連帯感や自信を持たせる。 	リーダー的存在であるT男・M男を中心に、自分たちがアイデアを出し、小道具作りを進めていき、それを多くの人に誉めてもらったことで、満足感と自信を持ったようだ。そのことは、2学期の「学習発表会」の合同学習で、学部を中心として練習や準備を進めていく姿へとつながっていった。

学習発表会

学習発表会は、日頃の学習の成果を発表する年1度の学校行事であり、家族や地域の人々を招いて行われる。小学部は劇と音楽の発表、作品展に出品する作品の制作に取り組んだ。

今年の劇は、グリム童話「小人のくつや」をアレンジして実施した。約4週間の単元の中では「学級では、細かい指導を与え、ひとりずつの演技を確かなものにして自信を持たせる」「合同学習ではクラスで充実させ確かにしてきたものを全体の場で発揮させ、成就感や意欲を持たせる」というように、クラス学習と合同学習を効果的に絡めて、進めていった。

次に、長期間にわたって行った劇指導の流れと指導の意図、それに伴うY男の変容について述べてみたい。



(3) 案内状を通して

行事単元の指導内容の一つとして、案内状の製作を組み入れている。行事によって違いはあるが、家の人、以前お世話になった先生、級外の先生、交流校の友だち等、行事に招待する人に出すものである。

案内状をこのように学習に取り入れ大切に扱っていかうとしているのは、行事に身近な人に来てもらうことによって意欲を高めると同時に、人とのコミュニケーションを図るには、話しことばによるコミュニケーションの外に書きことばによるコミュニケーションがあることを知らせたいという教師の意図がある。書きことばによるコミュニケーションは、目前にいない人とのコミュニケーションである手紙や必要に応じたメモの存在を知らせ活用していくことに発展していくと考えられる。そこで、学習発表会の案内状の製作を例にあげて各学級で、来てもらおうという意欲を喚起させ、また、書きことばによるコミュニケーションを発展させるためにどう学習を積み上げているかを述べてみたい。

気持ちの盛り上げを大切にし家庭との連携をとっていった事例…1組の実践…

①子どもたちの実態

家の人に手紙を書くことは、母の日や父の日のカードづくりなど4月以来の2回の経験があるが、まだ自分たちから言いたすことはなく、行事の前に書きそれを渡すという経験を繰り返していく段階である。文字を読むことは、何度か繰り返すことによって身近な絵カードとその文字カードをマッチングすることができるようになる。また、名前の弁別はできるが、書くことは自分の名前などを手を支えてもらいながら、点線で書いた文字をなぞって書くことができる子どもたちである。

②授業の進め方

○指導の重点 ・作りたい渡したいという子どもの気持ちの高まりを大切にしていく。

- ・補助的指導者をお家の人にみたてて、渡し方の練習をする。
- ・家庭との連携をとり、来てもらう喜びを更に高めていく。

○案内状の内容 ・名前のなぞり書き

- ・自分が演じる役（うさぎ・ことり）の絵カードと文字カードのマッチング

○授業の様子 ・発表会を後3日後に控え、発表会が近づいて来る緊迫感が感じられた頃に製作した。

- ・お母さんやお家の人があることを話し、「おかあさん来てね」と言いながら、写真を貼った。その時、E男は「キャッキャッ」と言って跳び上がり写真を大切に貼り、R子は大声で「おかあさん」と言った。
- ・教師が作成した案内状を見せ、作りたいという気持ちを高めた。
- ・補助的指導者がお母さん役になり、

きちんと両手で持つ・お母さんの方をきちんと見る・「きてください」と言って渡す

ということを押さえながら練習をした。できたら、しっかり褒めることも忘れなかった。

- ・生活ノート（連絡帳）を通して、持ち帰ったこと、出し忘れていたら促すこと、その様子を伝え

てほしいことを連絡しておいた。

③家庭での様子（翌日のE男の生活ノートより）

「これなあに」と言うとおわてて案内状を取り出し、私のところに来て「きてください」（アーアー）と言って丁寧に頭を下げてくださいました。「上手にできたね、おじいちゃんにも渡そうね」というと嬉しそう。夜になって、一人ひとりに丁寧に渡し褒めてもらってとても嬉しそうでした。日曜日には、みんなで行こうと思っています。



うれしそうに案内状を見せるE男

子どもたちの興味や個に応じた書きことばを取り入れていった事例…2組の実践…

①子どもたちの実態

「家の人に来て見てもらいたいね」と教師の側から話しかければ、「案内状」と言うことができる子もいるが、まだ必要に感じて自分から言いたすことはない。文字や絵を書いて案内状を作ることは全員好きな作業である。2年生のU男はなぞり書きを好み、名前は一人で書くことができるが、名前以外の文字は読めない。A子（2年生）は、文字と絵の弁別ができるが線を意識してなぞれない。Y子（2年生）は、清音の一部が読め、手を支えてもらうという援助で書くことができる。Y男は、自閉的傾向のある3年生の児童で平仮名や一部の漢字やアルファベットを読むことができるが、なぞりがきで文字を書く。同じくE子は3年生で清音の読字ができ、たどたどしい文字ではあるが聴写や視写ができるという実態の子どもたちである。

②授業の進め方

○指導の重点 ・同じ形ではあるが、個にあった課題を含んだ案内状を作成する。

○案内状の内容

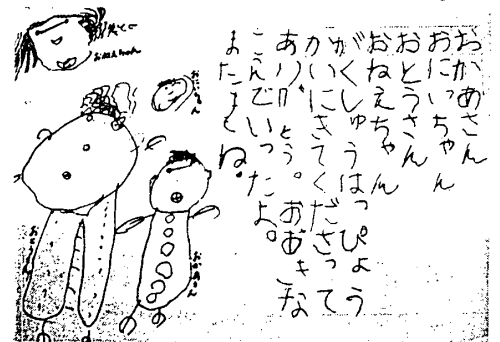
・N男の場合……書字も大切にしていきたいが、本児に文字を書かせようとするとう教師が内容を限定してしまう恐れがあり、今回の案内状では、本児の得意なワープロで案内状をうつことにした。

「学習発表会で何をやるの」「誰に来てもらいたいの」という教師の質問に答える形で、文章化していった。今回は特に文末の句点ということを指導したが、まだ定着するに至ってはいない。

・E子の場合……文章を考えるにあたっては、N男と同様に質問に答えるという形式で行った。まだ、1字書くのにも時間を要するので、なぞり書きの部分も取り入れ、「おとうさん、おかあさん、きてください。」という部分に聴写や視写を取り入れた。（以下略）

③案内状づくりのその後

案内状を出したので来てもらったということ意識づけ来年につなげるために礼状を作成するという事後指導もあわせて行った。



E子の礼状